

1949年～1953年  
嶋三吉没後60周年記念出版

# われらの詩



新らしい文學・藝術・社會・生活  
**希望** エスポワール

- 卷数 全2巻・別巻1・付録1
- 体裁 A5判・上製/A4判・並製/総約1、260頁
- 解説 宇野田尚哉（大阪大学大学院文学研究科准教授）

- 解説 川口隆行（広島大学大学院教育学研究科准教授）
- 海老根勲（元中国新聞記者）
- 推薦 御庄博実（元中四国詩人会会長・詩誌「火皿」同人）
- 小沢節子（近現代史研究者）

- 原本提供 広島文学資料保全の会・広島市立中央図書館

- 掲価格 本体70,000円+税 ISBN978-4-906943-20-3

原爆を意識的契機として広島で生まれた本誌は、眞実を語り、表現し、人間の苦悩を訴える「共通の廣場」を求める。若い世代が提携を模索した、文化総合雑誌である。前衛芸術への接近、保守勢力への抵抗、戦後フエミニズムの萌芽……戦後思想史・サークル運動史を解明する資料として復刻！

#### 【復刻版概要】

- 卷数 全2巻・別巻1・付録1
- 体裁 A5判・上製・308頁 ISBN978-4-906943-21-0
- 解説 御庄博実（元中四国詩人会会長・詩誌「火皿」同人）
- 掲価格 本体70,000円+税 ISBN978-4-906943-22-7
- 卷数 全3巻・別巻1
- 体裁 A5判・上製・総約1、780頁
- 解説 高良留美子（詩人・評論家・作家）
- 掲価格 本体96,000円+税 ISBN978-4-906943-04-3

#### 既刊関連図書のご案内

##### ○刊行

2012年11月

##### ○推奨

岩橋邦枝（作家）

##### ○解説

鳥羽耕史（早稲田大学文学学術院教授）  
成田龍一（日本女子大学人間社会学部教授）  
渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

##### ○掲価格

高良留美子他



## 三人社

〒606-8316

京都市左京区吉田2本松町4 白亜荘

電話 075-762-0368

FAX 075-762-0369

振替 00960-1-282564

※図書館様・書店様へ

小社は少部数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

●表示はすべて税別

## 嶋三吉没後60周年記念出版

### 復刻版 全2巻・別巻1・付録1

# われらの詩

1949年～1953年

本誌は、「原爆詩人」嶋三吉を中心に創刊されたサークル詩誌である。ここに集つた若き詩人たちは、戦後の政治的混乱のなかで、後世に残る数多くの作品を創作した。被爆都市広島で生まれた市民たちの声を、反戦と平和の記録として、また、戦後社会運動や文学研究の資料として、関連雑誌類と共に復刻！



○解説

宇野田尚哉・川口隆行・海老根勲

○体裁

A5判・上製/A4判・並製/総1、260頁

○本体掲価格

70,000円+税

○刊行

2013年6月



三人社

2013/10

復刻にあたつて

「ちちをかえせ／ははをかえせ」とうたつた峰三吉は、原爆で命を落とした「にんげん」、またその家族や周囲の人々に共感し、その代弁者になろうとした、やさしくてつよい男だった。

彼のもとに、広島県内の職場や地域、学校や結核療養所の文化サークルで活動する若者たちが集い、われらの詩の会が誕生した。

会の機關誌である『われらの詩』の創刊号は1949年11月20日、終り号にあたる第20号は1953年11月10日、4年間で計19冊が刊行された(第7号は発行されていない)。発行所は峠の自宅、編集人は峠のほかに、増岡敏和、且原純夫、古井誠三など職場サークルのリーダー格の発起人らが持ち回りで担当した。

本誌は創刊<sup>1</sup>初から職場サークルの連絡誌という性格を帯びた拠点的サークル詩誌であり、のちには中央の詩運動との関係においても全国的に認知される存在となつた。

や悲しみや怒りを表現した詩・文のほかに、ストックホルム・アピール署名運動や朝鮮戦争開戦を受けての反戦・平和を意識した数多くの作品である。書き手の多くは当時にあつては無名であり、広島県内外からは、赤木健介、赤松俊子、秋山清、岡本潤、栗原貞子、壺井繁治、丸木位里山代巴らが寄稿した。

三人社

内容見本

妹よ

外は嵐だ  
増岡敏和

40Wの電燈に  
からむ。

おくまでゆすべとしない  
母と子の

へ俺に一萬圓の金を

100

辻詩のためのメモ

マリを鑑賞され、ひとりひとり

にそれより多くの、しか  
就効的要素を結合して、ひそび

る辻々に姿を現すといふこと

をたい機械的に結びつけたの

し合い有機的に一個の作品を

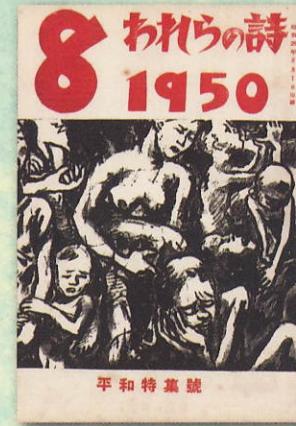
の詩・辻詩のための繪畫をし  
されてくる。

をもち、繪譜自身がリズミカ  
意味しない（或はそれも必要  
の時、辻詩のための繪譜さし  
されてくる。

(『われらの詩』第1号より)



1950年(昭和25)10月、「原爆の図三部作展」終了後 丸木位里・俊、壺井繁治、深川宗俊等の顔がみえる(平和アパート)  
『風のように炎のように』口絵より)



# 峰三吉との出会い

御庄博実（元中四国詩人会会長・詩誌「火皿」同人）

峰三吉が逝つて六〇年が経つ。僕が広島駅前で峰三吉と出会ったのは一九四九年の初夏であった。むしろ女性的なといつていい峰はすでに新日本文学会員で、共産党にも入党していた。六月、日本製鋼の全面ストライキに参加して「怒りのうた」で労働者の歓声を受けた。彼は詩を書き、花を愛し、文学運動に熱中し、和子さんを愛していながらときに大量の喀血を繰り返していた。僕も国立岩国病院で血を吐きながら、詩サークルを作つての療養中であった。

広島は旧制広高卒業の僕にとって学舎の街である。あの八月六日を記憶にとどめたまま、大量喀血して肺結核の療養生活がつづいたが、四年ぶりに広島を訪ね峰三吉と語らつた。詩とは何か、文学運動とは、喀血の不安について……など、など。「いま若い詩人たちを集め、いいサークルを作ろうとしている」と。その年十一月に「われらの詩」1号が発行されて、病床の僕のところへも届けられた。表紙裏に「ことば」として「詩の会」の詩に対する熱い思いが語られている。一つのサークルでない「詩運動体」としての模索を続けて、僕も岩国國病のサークルを「岩国國病支部」に変身し、3号から会の仲間となつた。その年六月朝鮮半島で戦火が揚がつた。被爆都市・広島も、海兵隊基地・岩国も、反戦の渦のなかでの「われらの詩」であつた。復刻へ熱い期待が山ほどある。

## 新たな光の下での再読を迫る

小沢節子（近現代史研究者）

いつ頃からだろうか。戦後社会運動や原爆文学を研究する若い人たちから、「われらの詩」という雑誌の名を頻繁に聞くようになった。やがて、このサークル詩誌が峰三吉を中心に一九四九年に刊行され、彼の死をはさんで五三年までつづいたこと、労働組合を中心とする職場や療養所サークルを束ねながら、「新日本文学」など中央の雑誌とも連携しつつ活動したことなどを知つた。だが、広島・峰三吉イコール原爆体験の表現という先入観は、覆された。表紙画を描いた四国五郎はシベリア抑留の経験を持ち、ほかにも中国大陸からの引揚者など、原爆だけではない、様々な戦争の経験を背景にもつ書き手たちが登場する。その多くは無名の、市井の人びとであり、朝鮮戦争、レッドページ、左翼勢力の分裂混乱、あるいは新憲法制定後も根強く残る「家」といった抜き差しならない「現在」に向かいながら言葉を紡ぎだしていく。

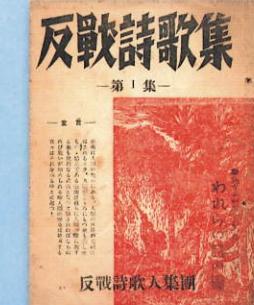
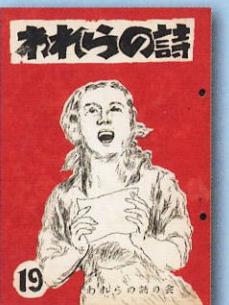
東西冷戦が東アジアの熱戦として展開した時代、彼らの詩作活動は反米反戦を掲げる平和運動という側面をもち、定型的な革命歌や、民族を超えた「共闘」や「連帯」も詠われる。だが、それらの言葉がどこから発せられ、どこへ消えていったのかを検証することなく、政治に引きずられた皮相な表現として葬り去るならば、六〇余年後の私たち自身が歴史から問いつめられることになるだろう。そして、こうした活動の中から、林幸子の「ヒロシマの空」のような、人びとの原爆体験を結晶化した作品が生まれ、「原爆詩人」峰三吉もまた、新たな光の下での再読を迫つてくる。原爆表象を研究する者のみならず、一九五〇年代の文化と政治に関心を持つすべての人にとって必読の雑誌の復刻である。

峰三吉が逝つて六〇年が経つ。僕が広島駅前で峰三吉と出会ったのは一九四九年の初夏であった。むしろ女性的なといつていい峰はすでに新日本文学会員で、共産党にも入党していた。六月、日本製鋼の全面ストライキに参加して「怒りのうた」で労働者の歓声を受けた。彼は詩を書き、花を愛し、文学運動に熱中し、和子さんを愛していながらときに大量の喀血を繰り返していた。僕も国立岩国病院で血を吐きながら、詩サークルを作つての療養中であった。

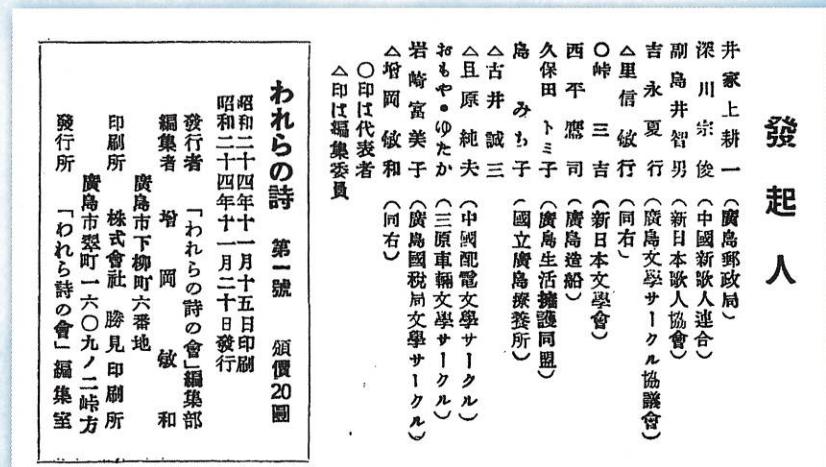
峰三吉が逝つて六〇年が経つ。僕が広島駅前で峰三吉と出会ったのは一九四九年の初夏であった。むしろ女性的なといつていい峰はすでに新日本文学会員で、共産党にも入党していた。六月、日本製

鋼の全面ストライキに参加して「怒りのうた」で労働者の歓声を受けた。彼は詩を書き、花を愛し、文学運動に熱中し、和子さんを愛していながらときに大量の喀血を繰り返していた。僕も国立岩国病院で血を吐きながら、詩サークルを作つての療養中であった。

広島は旧制広高卒業の僕にとって学舎の街である。あの八月六日を記憶にとどめたまま、大量喀血して肺結核の療養生活がつづいたが、四年ぶりに広島を訪ね峰三吉と語らつた。詩とは何か、文学運動とは、喀血の不安について……など、など。「いま若い詩人たちを集め、いいサークルを作ろうとしている」と。その年十一月に「われらの詩」1号が発行されて、病床の僕のところへも届けられた。表紙裏に「ことば」として「詩の会」の詩に対する熱い思いが語られている。一つのサークルでない「詩運動体」としての模索を続けて、僕も岩国國病のサークルを「岩国國病支部」に変身し、3号から会の仲間となつた。その年六月朝鮮半島で戦火が揚がつた。被爆都市・広島も、海兵隊基地・岩国も、反戦の渦のなかでの「われらの詩」であつた。復刻へ熱い期待が山ほどある。



音で山上に奏でられていた孤獨な自我の歌は、既に寂しい呴きのようになってしまった。今や歌が絶えざるためには人民の魂が鳴り出でねばならぬ時が來た。  
美しい詩は美しい人間生活の證言として以外には無く、われわれの抵抗はおのずから人民の魂にその聲を求めるべき何物を失つた時、自然のように力を増す勢を以て詩法は人民の醸見し得ない魂から再び生れ始めるであろう。



（『われらの詩』第1号より）

特集		目次	
井家上耕一 (廣島郵政局)	井深川宗俊 (中國新歌人連合)	峰三吉	壱井繁治
島井智男 (新日本歌人協会)	吉永夏行 (廣島文學サークル協議會)	吉永夏行	土居貞子
島みち子 (國立廣島探査所)	吉里信敏 (同右)	吉里信敏	大場義入
△古井誠三 (新日本文學)	○崎三吉 (廣島郵政局)	崎三吉	楠哲和
△且原純夫 (廣島造船)	西平鷹司 (廣島生活擁護同盟)	西平鷹司	吉永正昭
久保田トミ子 (廣島文學サークル)	島崎富美子 (廣島國稅局文學サークル)	島崎富美子	島中義之助
△増岡敏和 (同右)	△古井誠三 (中國電文文學サークル)	増岡敏和	川村庸雄
△印は編集委員	△印は代表者	印は編集委員	毛利和恵
「われらの詩の会」編集部		第一回	
編集者 増岡敏和	印刷所 増岡敏和	井上清	山岡和範
印 刷 所 増岡敏和	廣島市下柳町六番地	大崎正昭	増岡敏和
發行所 「われら詩の会」編集室	株式會社 膜見印刷所	峰三吉	土居貞子
		二志淳	吉永正昭
		三住洋	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
		山上博	吉永正昭
		大崎正昭	吉永正昭
		峰三吉	吉永正昭
		二志淳	吉永正昭
		毛利和恵	吉永正昭
</			

『広島文学サレクル』第1号～第4号

『風のよう<sup>ニ</sup>に炎のよう<sup>ニ</sup>』

『彼らの詩』の関連雑誌2誌と、峰三吉

『われらの詩』の関連雑誌2誌と、峠三吉の追悼集の計8冊を収録。『広島文学サークル』は、〈広島地方文学サークル協議会〉から1949～1950年にかけて、「とだえざる詩」は、〈広大わられる詩の会〉から1952～1953年にかけて発行された。また、『風のように炎のように』は、〈峠三吉追悼集出版委員会〉と〈われらの詩の会〉の連名で1954年に刊行された。

怒りのうた

卷之二

らは追われ  
きよう、閉された工場の屋上に  
にくむべき警察のはたはひるがへる。

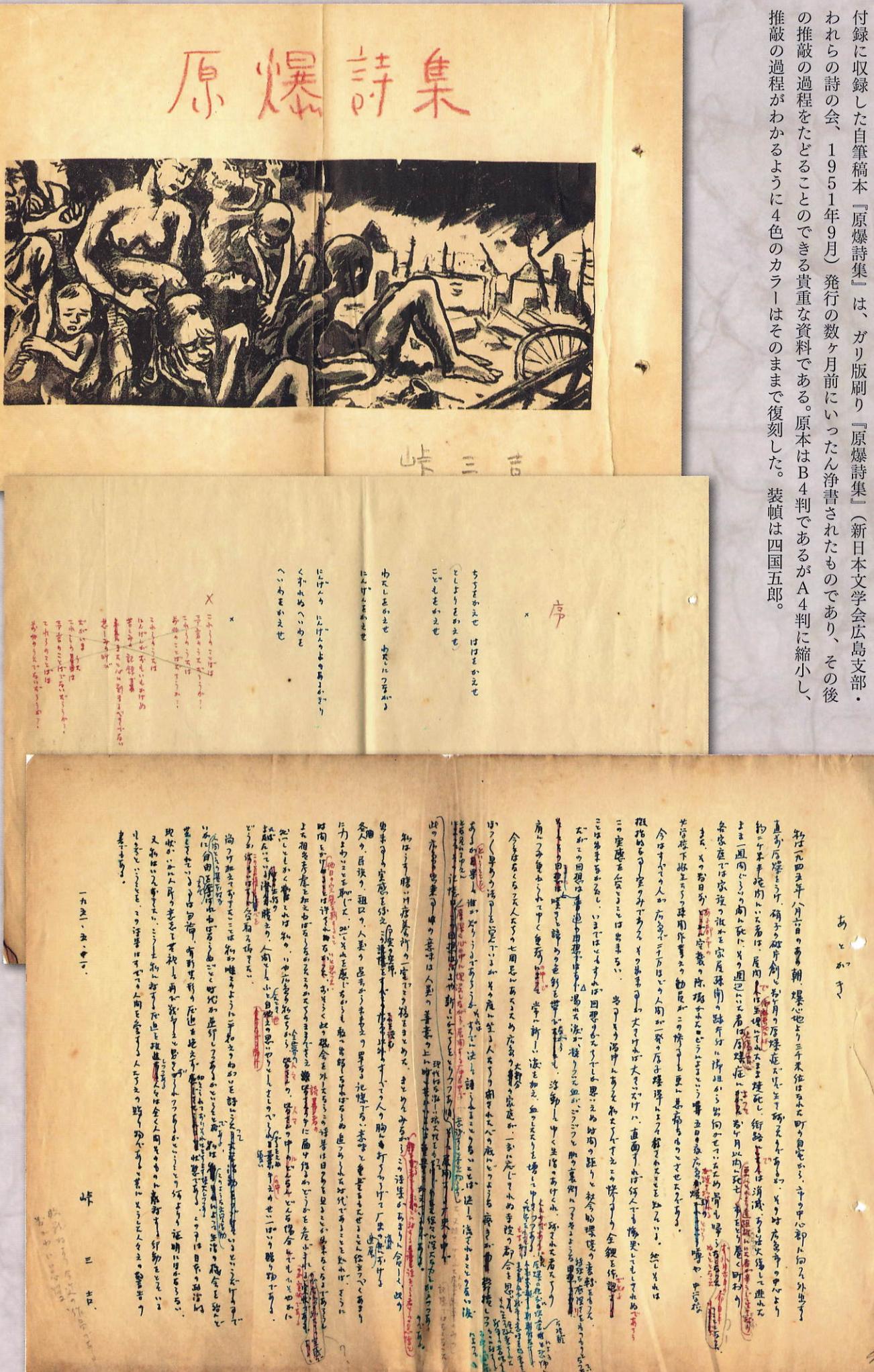
折られた旗さおはづなげ、おゝ！！  
縛られたりよりよう腕はふりほどけよ!!

たといわれらの血は块に吸われるとも  
われらの息は　けい帝の光に断えるとも――

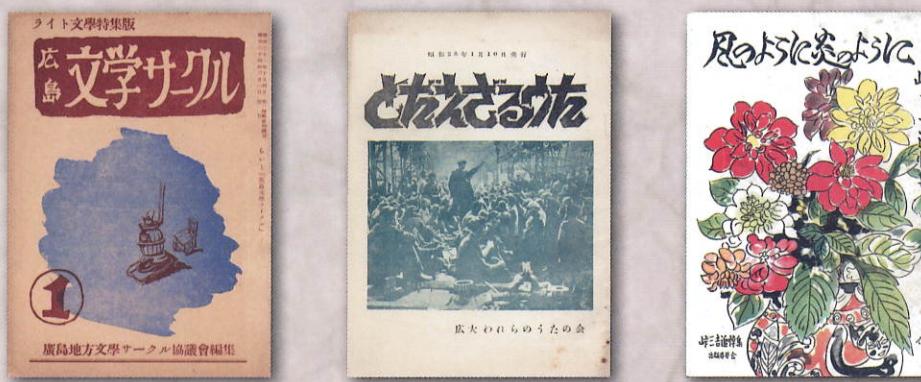
擧されたビストルを　とつとつと老労働者は訴え  
くびおりて背の児はれむれど女房らは去りもやらず、  
刻々とかずを増して工場をかこむ　組合旗のゆらぎのなかに  
うたとなるわれらの怨り。  
唄となるわれらのなみた。

付錄 島吉自筆稿本『原爆詩集』

われらの詩の会、1951年9月)発行の数ヶ月前にいつたん淨書されたものであり、その後の推敲の過程をたどることのできる貴重な資料である。原本はB4判であるがA4判に縮小し、推敲の過程がわかるように4色のカラーはそのまま複刻した。装幀は四国五郎。



(自筆稿本『原爆詩集』より 3点とも)



(『広島文学サークル』第3号より)

(『風のように炎のように』目次)